

◎作家 박완서 (朴婉緒) 1931~2011

- 京畿道開豊郡 (開城市郊外) 生まれ
- 3歳で父死亡、7歳でソウル移住、ソウル大学国語国文科中退
- 1970年 「나목」で小説デビュー (39歳)

◎主要作品

朝鮮戦争の体験をもとにした分断の悲劇、社会・家族関係における女性抑圧問題を扱った作品が中心。

나목 1970년

엄마의 말뚝 1982년

미망 1990년

그 많던 싱아는 누가 다 먹었을까 1992년

그 산이 정말 거기 있었을까 1995년

그 남자네 집 2004년

친절한 복희씨 2008년

못 가본 길이 더 아름답다 2010년

◎作品について

1. 主な登場人物

- ・ノウネのおじさん…姓はホン (洪)。同じ一族が代々暮らす小さな村、ノウネ出身。朝鮮戦争中、妻子を捨て一族の跡取りである甥とともにソウルに避難
- ・「私」…ノウネの隣村、ポムバウイ谷出身。戦争中に父や「ノウネのおじさん」とともに避難。現在は家族とともにソウルに暮らす。
- ・ソンピョ…ノウネのおじさんの甥で、ホン家一族の跡取り。
- ・ウンピョ…ノウネのおじさんの息子。「私」の幼なじみ。

2. あらすじ

偶然、同郷の先輩であるソンピョと再会した「私」は、彼の叔父にあたる「ノウネのおじさん」が現在一人暮らしをしており、病気でいつ寿命が来てもおかしくない状態との消息を聞く。驚いた「私」は、みすばらしい住宅で、独り寝たきりとなり死を待っただけのおじさんと再会。その姿を見て、「私」はこれまでのことを思い出す。

朝鮮戦争前、38度線付近にあったノウネの村で、おじさんは甥のソンピョ、息子のウンピョらとともに暮らしていた。ソンピョはホン家一族の跡取りで、父親が早くに亡くなったため引き取って育てていた。儒教道徳を重視するおじさんは何事も実子のウンピョより一族の跡取りであるソンピョを優遇。ウンピョの幼なじみであった「私」は、そんなウンピョの立場に同情していた。

戦争が始まると、年寄りや疫病にかかった子らを同伴するのが無理だったため、おじさんは妻子を残しソンプォだけを連れ避難。その後、ソウルで錠前を勲章のように衣服にぶら下げて売り歩く行商をして、ソンプォを育てた。一族の跡取りを守った彼は周囲から称賛されたが、「私」は彼がウンピョを捨てたことに怒りを感じていた。

時代の変化とともに、儒教道徳は若い世代に縁のないものとなり、妻子を捨てたおじさんの前歴は嘲笑や非難の対象となっていく。経済的に成功したソンプォはその頃からおじさんと距離を置き、「私」も彼らと縁遠くなった。

死の床にあるおじさんと再会した「私」。おじさんは「私」を見て何か懸命に話そうとする。「私」が彼のかすかな声を聞き取ってみると、それは実の息子、ウンピョを呼ぶ胸のつぶれるような絶叫だった。

### 3. 感想

「儒教道徳」と「南北分断」に揺さぶられ続けたノウネのおじさんの人生。

おじさんは、実子を捨て一族の跡取りを守ることで儒教的な価値観を体現するヒーローとなり、身にまとった錠前を勲章のように光り輝かせることができた。しかしその賞味期限はせいぜい30年。時代の移り変わりや人々の意識の変化に太刀打ちできず、悲しみの中で人生を閉じていく。

「儒教道徳」は確かに現代の価値観とは相容れないものだが、今後も社会の価値観は変化し続けるだろう。私たちは、それぞれの長い人生の中でそんな変化に対応していけるのだろうか。ふと不安に思った。

「南北分断」は、多くの韓国人の人生に大きな影響を与えた。まさかあの別れが永遠の生き別れになるとは！ 口に出さずとも、ノウネのおじさんはずっと後悔し続けたに違いない。

こんな痛みをどれだけ多くの韓国人が心に抱えて生きてきたのだろうか。韓国さまざまな小説を通じて、こうした痛みにもっと向き合ってみたいと思った。

### 翻訳練習

#### 81 ページ下から 6 行目から 82 ページ 16 行目まで

P 町は記憶の中にある上品な町とはかけ離れていた。昔、鯨の背中のごとく見えた瓦屋根は土の中に半分埋もれているかのように古びれて見えた。毎朝、菘箒で清潔に整えられていた路地は、歩道のブロックがなめらかでなく汚れてでこぼこしていた。家ごとにひさしのぎりぎりまで建物を広げているので醜悪に見え、ただでさえ狭い路地がさらに狭くなっていた。薄汚い路地をたどり宿屋がある三叉路に来るまでに、私はそんな路地裏に暮らす人々をひっくるめて蔑むようになっていた。

宿屋がある三叉路から左に曲がり、右手側三軒目の家はやはり柱が傾き、入り口の敷居が道より低く、沈みゆく廃船のように思える古屋だった。表札も地番もない。私は向かいの家の玄関前まで下がり、その家のへこんだ屋根の頂と瓦のすきまに生えている雑草を眺め、玄関扉の隙間から中の動きをのぞき見ようとした。倒れかけている家ではあるが、中の部屋は広そうだし、さまざまな形のごみ箱がいくつも置かれていてどれもあふれそうになっているところを見ると、何世帯かの家族が暮らしているようだった。

私は大きな咳払いをして玄関の門を開けた。玄関わきの練炭のたき口の前にうずくまって、洗

濯物を熱湯に浸して棒でかき混ぜている女がちらりとこちらを見た。開いた中門から、結構広い中庭といくつかの家族が借りて住んでいるであろう数部屋が見えたが、私は玄関わきの小部屋にノウネのおじさんが寝ているような気がした。ソンピョ先輩の大便の話がすぐに思い出される、腐った臭いが感じられたからだ。

#### 91 ページ下から 4 行目から最後まで

やがて、おじさんの手に力が入る様子が見えて口の動きも確かになってきた。私はおじさんのぼうつとした目に奥深い歓喜がこもっているのをしっかりと見届け、彼の口が話す声をはっきりと聞き取った。

「ウンピョよ、ああ、ウンピョよ」

おじさんはそう言っていた。息子の代わりに甥を連れて避難した後、私はおじさんが一度も息子の名を口にするのを聞いたことがなかった。ウンピョの幼馴染であった私を見て、ウンピョがどこかで生き永らえていれば同じような姿になっているのでは、といった悲しみがにじみ出てもよさそうなものだが、そのようなことさえなかった。おじさんは息子を捨てたと同時に息子の名前まで忘れ、あえて記憶から消して生きているようだった。息子の代わりに本家の跡取りを避難させたときも、普通名詞の息子であって、ウンピョという固有名詞の息子ではなかった。

おじさんが初めて口にしたウンピョという音声は、私だけがやっと聞き取れる程度のかすかなものだった。しかし、私の耳には胸がつぶれるような叫び声に聞こえた。おじさんは死力を尽くして胸がつぶれるほどの絶叫を上げていた。ああ、三十年余り前のウンピョの母親の胸がつぶれるような叫びは、今まさに復讐をやり遂げたのだ。

私は、それを長い間待ち望んできたにも関わらず、快感よりも虚しさに身を震わせた。

再びキーホルダーの露店が並ぶ通りに出てきたころには、日がまさに暮れようとしていた。日暮れの時間になると胸にたくさんの錠前を吊るして袋入りの米と鯖の塩焼を買い、よろよろ帰ってきたノウネのおじさんの姿が目につかんだ。米と鯖のせい、錠前が勲章に見えるおかしな錯覚は起こらなかった。おじさんは孤独でみすぼらしい錠前屋に過ぎなかった。

私が彼を直視できるようになるまで、少なくとも三十二年が必要だったということだ。